

草戸千軒発掘秘話① 芦田川河口堰を泳いだ調査員

草戸千軒町遺跡調査所(のち調査研究所)が設置されたのが昭和48年(1973)。以降、平成6年(1994)まで遺跡の発掘調査を進めてきました。この間、さまざまな出来事がありましたが、「草戸千軒町遺跡」ならではの発掘秘話を紹介してみましょう。

遺跡は芦田川の中州となっていたため、「水」で様々な経験をしました。川が増水すると遺跡は完全に水没します。そのため、梅雨の時期は調査を休止して、全ての機材ともに引き上げていました。問題は、年に何度も襲ってくる台風です。その度ごとに

完全に引き上げることはできません。出土遺物や発電機などは引き上げますが、テント・道具箱(コンクリートパネルと角材による手作り-中にスコップ・草削り・ビニール袋など発掘用品を納めます)などは、杭を打ちロープでしばり、水に流されないような対応をしました。

しかし、平成元年(1989)、あまりにも水流が激しく、道具箱などが流されてしまいました。台風が過ぎたあと、河口に向けて搜索すると、歩み板が川岸の各所に打ち上げられており、無事回収できました。そして、遺跡から5kmほど下流にある河口堰のフェンスに、なんと道具箱が打ち寄せられているではありませんか。「水が出た」あとですから、道具箱の周りは流木やゴミだらけです。そのままにしておく、道具箱は沈んでしまうかも知れません。そこで、意を決したS調査員、川に入って道具箱を引き寄せることにしました。

ただ、流木やゴミの中のため、身軽な服装というわけにはいきません。その時のいでたちは、靴下を脱いで運動靴の紐を結び直し、そして「つなぎ服」というものでした。岸から道具箱までは、10mと離れていない距離でした。無事道具箱は回収されたのですが、流木やゴミの中を服・靴を付けて泳いだため、S調査員は一気に疲労してしまい、手を差し伸べて貰ってどうにか岸へ上がることができました。

このようにして回収された道具箱、蓋を開けるとその中身は、ビニール袋・土のう袋などの軽いものでした。調査員の気持ちとすれば、スコップや草削りなどを期待していたのですが…。確かに、中身が軽かったからこそ沈まずに河口堰まで流れ着き、重量のあるものは残念ながら道具箱ごと水没したのです。

なお、沈まずに流れ着いた道具箱は「水が出た」中で浮輪の代わりとなっており、昆虫やなめくじが数多くへばりついていました。そして、河口堰を泳いだS調査員、いまだに「人生の中で最も疲れた泳ぎ」と言っています。ただ、こうした経験も遺跡への愛着の原動力の一つなのです。

(主任学芸員 下津間 康夫)



流水に呑み込まれた遺跡
中央左寄りに見えるのがテント 平成元年9月